玉城　徹

短歌実作の部屋

短歌新聞社

玉城 徹

短歌実作の部屋

短歌新聞社

著者略歴

大正13年仙台市に生まれる。昭和23年東京大学文学部美術史学科卒業。「多磨」「寒暑」「実体」をへて昭和53年「うた」を創刊主宰。著書に詩集『春の氷雪』歌集『馬の首』『樺木』『われら地上に』『玉城徹作品集』評論集『近代短歌の様式』『同時代の歌人たち』『石川啄木の秀歌』『北原白秋』『万葉を溯る』『茂吉の方法』など。昭和48年、歌集『樺木』により読売文学賞受賞。昭和54年歌集『われら地上に』により迢空賞受賞。

短歌実作の部屋

昭和58年2月15日初版発行
昭和58年5月20日再版発行

著　者　玉　城　　徹
発行者　石　黒　清　介
印刷所　株式会社　ニ　ッ　カ
発行所　短　歌　新　聞　社
〒166 東京都杉並区高円寺南 4—43—9
振替口座東京 5—21683 番
電　話 (03) 312—9185

(分) 1092 (製) 000222 (出) 4362　定価1800円

自序

この五年の間に、短歌の実作にかかわって書いた文章が、こんなにたまりました。そこで、ひとまず、それらをまとめて一冊とすることにしました。これをお読みになる方は、実作者としてのわたしが、現代短歌の実作の場で、どんなことを問題にし、それらを、どういう方向において考えようとしてきたかが、大体お分りになることと思います。

この中には、歌壇の他の作者の歌について記した文章もありますが、それらも「批評」という意味をもつものではありません。表題に「批評以前」とか「おぼえ書き」などという名前を付けたことによっても、それはお分りいただけると思います。つまり、他の作品を媒介にして、わたしは、実作の上に考えていることを述べたに過ぎません。

「実作」とはいったい何でしょうか。それは、ある一定の社会や時代の中で通用する共通の芸術観の上に成り立つ技術に習熟しさえすれば、まず一人前の作品が作れるようになるといった性質のものではありません。いわゆる「お勉強」とか「お稽古」とかいうものと、まったく無関係の世界なのです。

近代短歌と現代短歌とを、鋭く根本的に分離するものは、じつは、この点についての考え方の相違にあります。ですから、最近流行の「短歌教室」、「添削教室」などというたぐいは、まったく滑稽で悲惨な眺めを提供しているにすぎないと言えましょう。それは、近代短歌の衰弱と没落とを端的に告知するものにほかなりません。

しかし、だからといって、わたしは現代短歌の実作を、あれこれの恣意的な試みであってよいなどというつもりは毛頭ありません。何の訓練も、何の達成もない作物を、これはこれで、作者の特殊な生活条件、素材、もしくは特殊な主観的態度によって独自なものだから、それを認めてほしいなどという考え方を、わたしは、心から嫌悪します。

わたしに言わせれば、実作とは、客観的価値の、高度の実現でなければなりません。したがって、それは恣意と未熟とを厳しく禁ずるものなのです。そんなわけで、実作者が実作を続けるかぎり、実作上のいろいろの問題が、絶えずおこってくるのを防ぎとどめるわけにはゆかないのです。問題の発生すること自体が、そこに実作活動の存在することを証明していると言ってもよいでしょう。問題がもう何もおこってこないようだったら、毎月短歌を作っていたとしても、ほんとうの実作活動は消滅してしまっているのです。

これで、少しは「実作」ということの意味がお分りいただけたかと思います。しかし、そんな厄介な苦しいことには、自分はかかわりをもちたくないという人も、きっと出てくると思われます。自分は趣味で短歌を作りはじめたので、少し歌らしいかっこうがつけば、それで満足だ、自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

分は歌で生活記録を残したいだけだから、そんなに良い歌が作れなくともかまわない、そんな声を耳にすることもあります。そういう考えの方々がいることは、それはそれで結構だと思います。それでは困るなどと言うつもりは、わたしにはありません。

しかし、それが、そういう方々の本音だろうかということを、わたしはちょっと疑います。心の奥底には、やはり、少しでも良い歌が作りたい、立派な作品によって人を感動させたいという願いが、強くはたらいているのではないでしょうか。つまり、自分の生涯の課題として、この短歌というものに取組んで、何らかの得心のゆく成果を獲たいという考えは、多くの人の胸にひそんでいるのだと、わたしは見ています。短歌という詩形式には、人をそういう気もちにさせる力が、そなわっているのだと、わたしは思います。

短歌のもつこういう力を、わたしは、どれだけ尊とび信じているかわかりません。短歌は、わたしにとって単なる一つの手段ではないのです。運命的に、わたしの生は短歌に結びつけられたのだと感じます。短歌以外の別の何かでもよかったのだとは、わたしは思っていません。短歌の生命は、すなわち、わたしの生命です。人間であるから、表現の一手段として、短歌に拠るというのではありません。短歌において、わたしは、どうやらこうやら、はじめて人間としてあり得るのだと思っているのです。

こんなわけですから、わたしは一人の短歌実作者だというに過ぎません。それ以外に、どんな知恵も力も、社会的地位も資格も、もっているわけではないのです。実作上の問題に真剣にとり

組むこと以外に、わたしには何のとりえもありません。そして、実作上の問題というものは、単なる理論、理屈のようなものではなく、実践をまって、はじめて意味を生ずることのできるものです。それ故に、この一冊の内容が、読者の理解を啓発する一筋の光も含んでいないことは、当然のこととしてお赦し願わなければなりません。

ただ、わたしのような貧困無能、浅学非才のものが、実作上の問題をかかえながら、一歩一歩緩漫な前進を続けている姿が、実作に志す方々に、いくばくかの勇気を授けるよすがともなれば、よろこびこれに過ぎるものはありません。

短歌新聞社の石黒清介氏のすすめによって、この本をまとめました。また同社の今泉洋子さんが、模写編集その他の労をとられました。謝意を表します。

一九八二年九月十一日

著者

目次

自序

批評以前

蓄積の断面について……12
伝習との戯れ……20
作者の出現……28
少数者のために……36
現在の権利……43
実作者の立場……51

会員への手紙

会員への手紙……62

結社について……64
歌人と歌と……67
視ることについて……70
短歌とは何か……73
良い歌とはどんな歌か……75
短歌形式の特質……77
いかに読むか……80
ことばと自分……83
「独創」について……86
歌壇作品おぼえ書き（1～6）……91
短歌の戦後……137
哲学と文学
その一……152
その二……158

短歌雑話……167
佳品鑑賞（1～18）……179
答問録……249

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

短歌実作の部屋

批評以前

蓄積の断面について

わたしが述べようとするのは、最近刊行された歌集のいくつかについての感想である。しかし、それは書評でも紹介でもない。それらを、わたしがどう読んだか、また、読むことによって、わたしの中にどんな感覚や、思考が生じたかを書きとどめておこうと言うのである。すなわち、わたしは作品批評を行おうとは思っていない。むしろ、一人の作者が、他の作者の蓄積に面した場合におこってくる、批評形成以前の、いわば「素朴な」感想を語りたいと思っている。そんな感想が誰かの役に立つなどと考えることは、うぬぼれに過ぎないだろうが、わたしなどは、他の作者からそういう感想を聞きたいという欲求を少なからず感ずる。わたしのように感じてくれる読者も、まるでいないわけでもなかろう。

こんなわけだから、わたしがそれぞれの作者を全面的に研究し、その全体像を明らかにすることはできない。ある角度から見た、一断面しか、ここには記述することができない。それは、場合によっては、その作者にとって、不当と感じられるものであろう。しかし、わたしは、客観的に正しい評価を下そうなどとしているわけではないから、この点はお許し頂くより仕方がない。また、わたしの感想が多少、書評などより時期遅れになる場合も多いことと思う。これもご諒承を願う。

もう一つ。自分の歌集を是非とも扱えという注文は、何とぞお控え願いたい。それをして頂くと、わたしの精神活動が、はなはだ混乱した状態に陥る。「浮世の義理」によって感想を述べても、まことにつまらないだろう。この点についても、ご理解をいただきたい。今回は昨年、下半期の歌集について述べる。

(1)山田あき『**牀上の月**』(一九八〇・一〇)

枇杷木槿(もくげ)夾竹桃などわが庭のみどりのなびく賑いに立つ
訴えてまなこぎらつきし老舎はも史記より現(いま)に継ぎしまなこはも
にんげんは自らの死をえらぶべし恥なき老舎の死と君は謂う
杉山の雪むらさきに昏れんとす帰ればただに女餓鬼いっぴき
断橋の端に消残る淡雪の匂い白じろとふるさとがあり
無名者は死をもて規(ただ)す生きのびし現し身われの哭(こく)はまことか
晩秋の屋にまつわるアラベスク物の所在のなみだぐましも
武蔵野のおもかげけぶる大欅しずけく威あり月にそそり立つ
花冷えの大陸の野を歩みとる老躯一歩の想いたぎりて
厳飾(ごんしょく)の故宮の壁のひだひだに人民のあぶら昏昏(こんこん)と聴く

*

「私は、現代には現代にふさわしい抒情、生きて訴えかける抒情が必要ではないか、表現内容

と韻律の別の側面が考究されねばならぬのではないか、それには一に現代の表現者としての認識と思考が加わるべきであると考えます」（著者「あとがき」）

*

わたしは、山田あき作品のよき読者には、なかなか成れそうもない。この作者は「現代にふさわしい」自分の思想を、短歌によって、露骨すぎるほどはっきり語ろうとしている。その思想に対して、ある程度の理解はもてる。しかし、わたしを、その思想の中に誘惑し、その思想に参入せしめるだけの力を、作品がわたしに対して発揮してくれないのを残念に思う。これは、この作者とわたしとの思想的立場の相違によるのであろうか。いや、そんなことはあるまい。そんなふうに考えることは、文学上の敗北思想にほかならない。どんなに立場を異にする思想でも、文学作品として結実された思想は、十分に読者の精神に滲透できるはずのものであろう。

集中各処に「無名死」「思想死」もしくは「孤高死」「孤独死」「自然死」などの熟語がちりばめられている。それが、わたしの理解にとって大きな障害になってくる。つまり、そのような裸の観念を言語素材として語られた思想というものは、わたしにとっては微弱なはたらきしか及ぼさない。どんな人物が、どんな死にざまをしたかという具体が、具体的なことばで表現された場合にのみ、わたしの心は動かされる。

誤解なきようにつけ加えるが、わたしは、自然主義的な意味での描写ないしは、実相観入が良いと言っているわけではない。また、観念があってはいけないなどと言っているわけでもない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com